

第25歩「桜の馬場の祝事と桜御門の復元」

玉藻公園の桜の馬場で、去る4月18日の夕刻、東京2020オリンピック聖火リレーの締めくくりにセレブレーション（祝事）が行われました。その前段、内堀に浮かべた和船に、リレーランナーと高松松平家ご当主が乗りこみ、聖火を船で運び、その後ろを高松市指定無形文化財水任流の保存会の人達が日本泳法で追従しました。夕日に映えた天守台の石垣の前を行く和船と水任流のゆったりとした泳ぎが作るお堀の水の縞が、高松のこれまでの歴史の流れをなぞっている様にも見えました。高松のまちの歴史は、16世紀後半に生駒親正がこの地に城を築いたことに始まります。その築城当時から桜の馬場と三の丸を繋ぐところにあったとされるのが、現在復元整備中の桜御門です。

来たる6月6日、その桜御門の上棟式（棟上げ）が行われます。柱・棟・梁などの骨組みが完成した段階で執り行う行事で、無事に工事が進んだことへの感謝と、完成を祈願する儀式です。余談ですが、私は「棟上げ」と聞けば、「餅投げ」を思い出します。上棟の儀式と併せて行われる、柱の上から餅や菓子、清酒の木札などが撒かれ、それを目当てに集まった人が、我先にと取り合う行事で、子供の頃の楽しい思い出です。

ところで、桜御門は、昭和19年に国宝に指定されることが決定していましたが、それが翌昭和20年の高松空襲により焼失してしまい、国宝指定も水の泡となりました。今回の復元整備は、言わば戦災復旧事業でもあるのです。そして、この復元により、大手（城の正面）の旭門から入り、桜御門をくぐり、御殿へ進むという往時の景観と城の雰囲気再現できることの意義は大きく、期待がふくらみます。

文献によると、桜御門は節句などの特別な日には桜の紋章の幔幕で飾られていたようで、完成後は史実に従い、これを再現するとのこと。聖火リレーの祝事には間に合いませんでしたが、これから桜の紋章が何度も見られるよう、目出度い日が多くあることを願っています。

